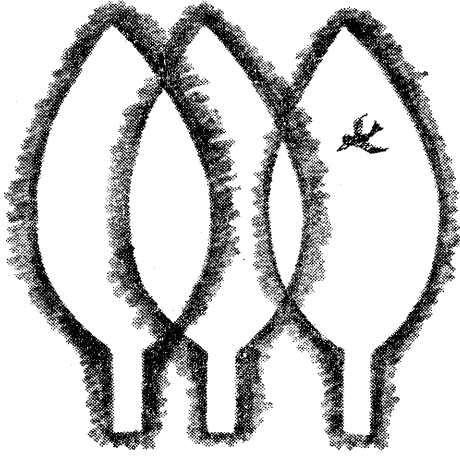


# 坂元彦太郎先生を囲んで

(第一回)



長年幼児教育に取り組んでこられた坂元彦太郎先生を囲んで、お話を伺いました。坂元先生は、岡山大学教授、お茶の水女子大教授等を経て、お茶の水女子大附属小学校長、附属幼稚園園長をつとめられ、現在は十文字学園大学女子短大の学長でいらっしゃいます。

## 出席者

立川多恵子（十文字学園女子短期大学教授）  
中村 悦子（大妻女子大学助教授）  
守永 英子（お茶の水女子大学附属幼稚園）  
本田 和子（お茶の水女子大学教授）

——坂元元生を囲んで、昔なつかしい方たちからいろいろなお話を伺うことにいたしました。ひところ先生が長らく顧問として参画なすった「キンダーブック」の編集をおひきになったと伺ったのですから、それらをめぐる、様々な思い出やらエピソードやらを伺っておきたいと思えます。それから、この機会に、今までそれこそ何十年か幼児教育の世界を歩いていらしたわけでございますから、そこで体験なさったことなども伺いたしたいと思います。

お生まれはいつでいらっしゃいますか。

坂元 明治三十七年一月二十五日。日露戦争が始まる十日位前ですね。ちょうど及川先生が私より一〇才上で、その十一才上が倉橋先生なんです。

——先生は「キンダー・ブック」の発刊にも倉橋先生と携わっていらっしゃるんですね。保育絵本の本当の先駆的な役割をとった「キンダー・ブック」を戦後どのような発刊されて、どういう御苦労をなさってきたかお話しただければ……と思えます。

坂元 僕は倉橋先生の遺言で「キンダー・ブック」と関係したつもりなんです。ちょうど戦争直後に私が文部省に来て、いろんなことがわからず、相談相手が誰もいない時に、倉橋先生があらゆることについて相談相手になってくださった。教えていただいたことが頼りになっていろいろな学校教育の骨組ができたんです。

そしてまあ、先生が幼児のことを一生懸命やろうとなさったのに誠に感激して、それから私も倉橋先生と同じようにやるようになっちゃったんだね。倉橋先生の後を継ぐ、というと語弊がありますが、残された仕事をやるかと思つたことが一つ。

それから、また直接に頼まれて「キンダー・ブック」をやったんです。倉橋先生は三〇年近くやってこられた。ですから、それより短い期間にやめる訳にはいかなかった。ちょうど三〇年たったときに、たまたま病気がなったものですから、やめさせてもらったわけです。

### 倉橋先生との出会い

——先生も結局倉橋先生と出会われて、幼児教育に興味をおもちになったように思われるのですが。

坂元　そうですね。僕が初めて倉橋先生にお会いしたのは、昭和十五年の秋だと思います。戦争が段々盛んになってきた時で、教育界が国民学校を作って、一連の教育改革が計画されている時代でした。その時、国民精神高揚のためとかいって、一種の学会みたいなものを開いたんです。それに、私が小学校の方の代表、倉橋先生が幼稚園の代表として選ばれて、発表しました。その時に初めてお会いしたんです。

——そうでしたか。

坂元　少しさかのぼりますとね、私は大学を出てから師範学校の教師になったのですが、次第に、小学校の教育、特に低学年、僕らは幼学年といったのですが、に興味を持つようになった。そうした時に、倉橋先生の一冊の評伝を読みまして、非常に感銘が深かった。

それから、滋賀県の師範に転任し、そこで付属の主事になりましてね。そこで幼学年に力を入れて一生懸命や

ったものです。

倉橋先生もね、いろいろなことをなさって、それから幼児の教育に移っていった。ですから、私もいずれば幼児の方にいくかもしれない、という予感がありました。そんな時倉橋先生とお会いしたんですが、その時、先生は突如として「大東亜共栄圏」という言葉を使って、それにふさわしい幼児の育成をなくちゃいかん、という発表をされました。

「ああ、この先生も大東亜共栄圏って言うようになったのか」と思うと同時に、そうしなければ身が守れないし、倉橋先生の場合は、本当に日本の幼稚園の代表なんだから、自分が何かで落とし入れられたようなことが起こると、全体に類を及ぼす、というようなことを考えられるんだな、と思いました。

戦争中、先生はすっかりあんな風になっちゃった、って非難する人もありますけれどね。当時は当然なんです。向こうの爆弾が落ちてくるわけですからね。お互い同志を守るっていうことが必要なんで、その上で最高の

譲歩をされたわけです。決して一〇〇%屈服したわけではないから、逆に当局から疎んじられてましてね。非常にいじめられましたよ。戦争中には、例えば『幼児の教育』とか、紙をほとんど止めるって脅かされて、それで先生が泣きついたりね、いろんなことをなさっているんですね。「キンダー・ブック」という名もむりやりに変えさせられています。

それから、戦争が一番激しくなった戦争終末期になると、3つか4つ残っていた雑誌を統合して、「御国の光」っていうのを出した。

——「日本の子ども」っていうのもあったようですが。坂元「御国の光」っていうのは「キンダー・ブック」の改名だったかな。最後が「日本の子ども」だったと思います。

#### 幼稚園から幼児園に？

それ以来、先生とお目にかからなかったのが、昭和二十一年に再会しまして、学校教育法を作る際にお世話に

なりました。

私は、その時、当時の文部大臣から呼び出されて、青年教育の振興を頼む、と言われていたんです。

当時の高等学校とか、中学校とかはもう一種の廃虚になってましたからね。その中から新しい制度をつくっていかなければならいんです。幼稚園もそうでした。特に幼児教育のところは全部私ですが、誰も教えてくれる人がないものだから、本当に苦労しました。それで一々倉橋先生に相談したんです。

その時、一番の問題は幼稚園という名前でした。私は幼稚園を幼児園と変えた方が、一般普及をするためにも、また大衆的な教育のためにも、いいんじゃないかと。国民学校を小学校に変えますから、幼稚園も幼児園に変えた方がいいって、私は正直思ったんです。ところが、倉橋先生に言ってみたら、倉橋先生は他のことは私の言ったことにほとんど賛成して下さったけれど、この時だけは断固として、「変えないでほしい」とっておっしゃった。

それで私もそれだけは譲ろうと。幼稚って言葉を調べてみたら、幼児のことなんですからね。昔の古語を新しい言葉に直すだけなんだから、それほど変えるとは私は思わなかった。今になってみると、倉橋先生の気持ちが良いわかるようになりました。その時は、倉橋先生がそう言われるのだったらそうしよう、と思って今に至っているんですが、そのことが一番印象にのこっていますね。そして、それから先生とは段々仲良くなったんです。

——先生が戦後の教育復活の時に文部大臣から呼ばれたいきさつについては、あまり存じないんですが。

坂元 そうですね。戦前、私は岡山の女子師範におりまして、そこに幼稚園がありました。もう児童中心な教育というのは小学校では出来なかった。だから幼稚園は、私の思っていることが自由にやれるし、実に楽しいし、しょっちゅう入りびたっておりました。私はそこで具体的な幼稚園のあり方を覚えたんです。

——文部大臣から先生が呼ばれて、学校教育法の制定に

尽力なさったのは、やはりそれまでの先生の自由な付属幼稚園の実験みたいのが……、

坂元 それを認めてた人があるんでしょうね。私はそれが不思議なんです。当時悪口言われたおぼえはあるけど、役所側が認めてくれて、引っぱられるなんて、想像もしませんでしたからね。日本って所は不思議な所なんですね。

#### 附属幼稚園の10年間

——附属幼稚園時代の先生はいかがだったんでしょうか？

坂元 困っちゃうんだよ。皆さんには叱られたこともあるしさ。

——すごく頼もしい園長先生でございましたね。今でも先生のお言葉を支えにしていることがあるんですよ。

お茶大では珍しく、カリキュラムをつくったことがあったんです。その時先生は「これはね、しょっちゅう見なくたっていい。時々開いて見ればいいんだよ」っ

ておっしゃったんです。これは、先生が理論をもってきて、この幼稚園で実践をさせる、という姿勢ではなくて、実践しているものを大事にして、そこから先生が、少し外に説明できるようなものに形づくって下さった。

先生のこうしたお気持ちに現場は支えられてきたんです。

もう一つあるんですけど、研究会の時に、皆がやはりいろいろ心配しましてね。そうしたら、先生は「あなた方はね、そうすればいいんだよ。説明は僕がいくらでもしてあげるよ」っておっしゃって。本当に大きな傘を広げたような十年でした。

坂元 倉橋先生が、大体それに似たような態度をとってらしたんです。僕はそれに負けまいと思ったんですよ。

——ですけど、きっと先生にはいろんな思いがおりになって、ご自分の思いを保育の中に生かしてほしいという部分もおりになったんじゃないかと。その辺をうかがってみたいと思うのですけど。

坂元 そういう風に思っ下さるのは大変ありがたい。

それは、自分にも自分なりの考えがあるけれども、違ってたふうにやってらっしゃる時には、もう一度そちらの立場になってみて、必ず解釈し直しました。

——そのへんを具体的に伺わしていただけるとおもしろいんじゃないかと……

坂元 そうね。たとえば、倉橋先生は子どもの描く絵の指導はほとんどなさらなかったでしょう。それと同じように、時間割がどうの、とかそういうことは平気で破壊的、革新的なことを言われましたけど、実際のこと、こんな歌をこんな風に歌ったがいいとか、こんな踊りをこんな風に踊った方がいいとかいうようなことは、おそらく言われなかったと思いますね。私はね、あれでいいと先生が思ってらしたとは思わないんです。でも、個人の見識は大事に思ってらした。それを大切にしたら、ということではないかと思えます。

その証拠に、昭和一〇年ですか、「系統的保育案」をお出しになりました。あれには単元保育といった欄もあるのだけれど、昔ながらの欄もあるんです。そういうこ

とを両立させて良いんだ、と思われていたと思うんですよ。

——そういえば、先生が絵画製作の展覧会をご覧下さった時に、自由な発想をしているものを指して「僕は一番気に入った」とおっしゃったことがあります。

坂元 私がそんなこと言ったのは、それが最初で最後かもしれないですね。そういえば、当時はいわゆる創美の運動が盛んな頃で、私はそういう面を皆さんに変えてほしかったですね。あの運動は大人のもっている審美観を投影したものですよね。

——子どものある部分を強調して、大人が満足するような……。女の子が絵を描く時にはどうしても女の子を描いて、チューリップを描いて、おひさまが光っている、ということが多かったんですけど、先生は、それが子どももの安定した気持ちの現われだ、とおっしゃったことを覚えています。

坂元 そう。チューリップが一生涯いちゃ困るけれども、時にはこういう絵を描いたっていいんだ、って言い

ましたね。まあ二〇年も前の話ですね。

そういえば、お茶の水はまだハトポッポ体操をやっているんですか？

——先生、それ、何年か前にやめましてね。ハトポッポ体操で、子どもが生活を中断されて、おもちゃを放り出していくんです。そういう形が不自然だ、という声がありまして、やめたんです。

坂元 私はやめるにも理由があると思うし、やるにも理由があると思います。

文明社会に住んでいますと、やりかけたものをパッと転換して、生活が変わるといふこともある。だから、体操の時とお帰りの時と、それからお昼の時と、この三つくらいはきちっとして、いつの間にやら習慣ついてしまっう、っていうのは、その他の時に自由に遊べる、逆に垣根になるんじゃないか、とも思っていたんです。ですけどね、やめるにも理由があります。どの発達段階の子どもも一遍に線が引かれる、というのは多少無理だと思っ

ていたし……。

だけど、垣根みたいなものが一方ではきちんとして、他のことでは大目にみる、っていうのがいいんじゃないかと思います。何もかも大目にみるのではなく、どこかできちっとしながら、大目に見ることはどこまでも大目にみていくっていうのがいいと思いますね。

ただ、幼稚園の子どもには、いじめられましたね。倉橋先生もよくいじめられて逃げて帰ってきたっておっしゃってましたが。

——皆がまとわりついてね。先生、お背が高いから、足に皆がつかまるんですよ。

坂元 今でもね。イチョウの木を見ると、あそこで私のカメラのキャップをポーンと投げたやつがおるんで、まだあそこにあるかなって思いますよ。

——まあ、そうなんですか。戻らずじまいですか。

坂元 それから、眼鏡。私がいかけた眼鏡を置いておくと、ひよっと眼鏡を隠しちゃってね。長いこと出てこなくて、困ってた。ふっと持ってきてくれたりしました

——先生は良くいらして、子どもを個人的に見て下さってましたよね。子ども全般ではなく。本当にありがたかった。今の思い出話を伺って、私、今の自分の立場がよくわかってきたような気がします。

(以下は次号に続きます)

× × ×